

英語科編 20

第120号

平成22年3月1日

40ミリオンスター『思考の整理学』の著者

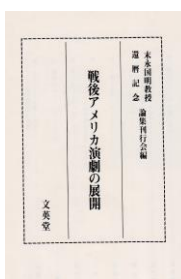
外山滋比古在職22〜24 お茶大教授
 2009年の読書界では、いくつかの本が話題になりましたが、その中で、「東大生・京大生に、ここ10年でもっとも読まれた本」に『思考の整理学』（ちくま文庫・1986初版）がありました。この著者が外山滋比古です。読み物としては、たくさんある外山の著作の中では比較的筋の通った読みやすい随想です。外山は、現在までに多数の随筆・著書を著しています。その中で一番読まれている著書がこの著です。言うまでもなく、外山は英語の教官ですが、この著書は、「考える」ということと、ことばの機能などについて書かれ、英語のことを多く述べているわけではありません。そのような彼が、なぜ英語に興味を持ったのか、そして、なぜ、この著書に現れているように、どちらかといえば言語学的な面に関するような随想を、この著以外にも多数記すようになったのかについて、彼の中学時代や附属中の教官時代のことからある程度類推されます。

外山が、中学校時代を送ったのは、昭和十年代のまさに戦争中のことでした。そのような時代に、英語を専攻しよう、東京高等師範学校を受験してみようか、と思つた理由を彼は次のように述べています。

「『どうして英語なぢやるんだ。』いまだき英語科を志望するのは、どんなものかなあ。」「英語科にケチをつけることは前に、(担任の)先生は、『お前がね、高等師範をうけるとはねえ。本当に教師になりたいのか、お前が、師範とはねえ。おどろいた。』と嫌味をひとくどりやつたのである。実は、東京高等師範学校へ行かなくてもよかった。・・・たまには親の言うことをきくか。小馬鹿にしている担任にケチをつけられると、天邪鬼だから、よし、それなら、受けて合格して、ハナを明かしてやろうというイタズラ心が頭をもちあげた。あんなに言われなければ、高等師範も、英語も志望しなかつたかもしれな。」「と記しているように、彼の反骨心が、愛知の田舎に生まれた外山

を東京に押し出すことになりました。昭和16年、東京高等師範に入学し、さらに、昭和19年に東京文理科大の英文学科の学生になりましたが、そのときは、当然のように学生の数も少なく、戦後になつても教員免許をもっているものは外山だけであり、大学在学身分を伏せたまま、本郷中学の教員を一時期務めました。本郷中学の教官生活は気に入っていたようですが、卒論もあり、わずかに1年足らずでやめ、卒業するとすぐに附属中の教官となりました。しかし、外山は附属中ではあまり良い思い出がありませんでした。「中学生はもっと可愛いのだと思つていたが、この生徒は妙に教師すれしている。」「先輩の教師たちもあまりやさしくなかった。」「それは別に父兄がえらすぎる。」

等々のことを感じていたようです。しかし、このように附属中学がおもしろくなくて、いわば悶々の日々をすごしていたときです。彼と前後して附属の教官となつた国語の鈴木一雄、漢文の鈴木修次の三人が集まつて「三人会」というものをつくり、めいめい1人がスピーカーになつて、自分のしていることについて話をし、それをさかなにおしやべりする、ということをはじめました。この会が、外山の見聞、考えなどを大きく広げたことは間違いないところで、その後の外山の仕事に大きく寄与していると思われま。外山は、この後附属中学の教官を辞めて大学の特別研究生となりますが、この二人は、すぐに東京教育大学の助教になり、「三人会」は彼らがそれぞれ別の大学(外山はお茶大へ、鈴木一雄は金沢大学へ、鈴木修次は広島大学へ)に勤めるまで続きました。外山は、お茶大・昭和女子大教授等を勤めますが、職を辞してからもたくさんさんの随筆を著していることは、前述のとおりです。外山の著書は、みずす書房刊『著作集』以外にたくさんあり、現在もたくさんさんのエッセイを発表しています。たくさんある外山の著書の一部です。



41 アメリカ演劇の研究

末永 國明 東京文理科大卒 在職24
 28 東京教育大・埼玉大教授

戦後すぐの教育界は、さまざまな混乱をかかえ、特に、英語教育においては、英語が「敵性語」であるとして、履修する学生も少なく、ましてや教員免許状を持つものも多くなかったことは、外山滋比古の随想にも書かれています。そのようななかで、数少ない英語専攻者のひとりであったのが、やはり、附属中の教官となつた末永国明です。このころの東京高等師範、東京文理科大学の英語科のようすについてや、戦後の混乱の中における「英語教育」に関する諸問題、あるいは、学生の進路先が教職だけではなかったこと、などについては、『東京教育大学文学部記念誌』のなかで、末永自身が記しています。そのような中で、東京教育大学に、アメリカ文学の講座が開かれ、末長らもそれに参加協力し、次第にアメリカ文学も取り入れられた授業が行なわれたこともわかります。末永国明編『戦後アメリカ演劇の展開』文芸堂昭和58。

42 津田塾大卒の初の女性教官

黒崎 昭子 東京出身 昭和25津田塾大卒 在職25〜47

戦後になり、附属中も男女共学となり、女性教官も採用され始めますが、英語科のなかの最初の女性教官は黒崎昭子です。当時、東京高等師範には女性の学生が1人も卒業生にはおらず、英語教育で、それまで定評のあつた津田塾大学の中から、黒崎が選ばれて、初の女性教官になつたと思われま。黒崎は、昭和47年まで附属中学の教官を続けました。